

平成21年5月15日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19530093

研究課題名（和文） 岸信介日記と関係史料による戦後政治の歴史的分析

研究課題名（英文） Historical analysis of the postwar Japanese politics based on the diary of Kishi Nobusuke and other sources

研究代表者

牧原 出（MAKIHARA IZURU）

東北大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：00238891

研究成果の概要：本研究では、第1に山口県田布施町郷土館が所蔵する岸信介関係資料のうち、日記、手帳、書簡を整理し、戦後とりわけ1960年代の岸の行動を追跡した。第2に、これらの資料と、既公開の日記やオーラル・ヒストリー記録を用いて、1960年代以降を政治史の対象として分析した。第3に、その際の焦点に、岸の政党構想・国家構想と、1982年の岸の自民党最高顧問就任を選び、その意義を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学

キーワード：岸信介、日本政治、1970年代、自由民主党、田中角栄

1. 研究開始当初の背景

戦後日本への政治外交史からの分析は、一次史料について『佐藤榮作日記』・『楠田實日記』という首相・秘書官の日記が公開された佐藤内閣期までが接近可能な時代であり、1970年代以降については未踏の領域であった。その理由は、1970年代以降の基礎史料がほとんど存在しないためである。これに対して、本プロジェクトは、1970年代の岸信介の日記・手帳という一次史料をもとに1970年代への政治外交史的分析を行う点で戦後日本の政治研究の幅を大きく拡げることを課題とする。岸の日記は1975

年から1986年まで、手帳は1971年から1986年まで各年につき所蔵されており、1970年代以降の岸の活動を知る基本史料である。内容としては、ロッキード事件前後の田中角栄との会談日程や、全斗煥韓国大統領就任式での全の人物印象、台湾・フィリピン関係者との会談日程などの内容を含んでおり、首相経験者として国内政界から外交にわたる多方面で岸が活動していた状況を記録している。こうした事実上の未発見の資料を広く研究者の用に供し、それをもとに日本政治外交史の研究者を組織して研究を推進することによって、これまでほとんど試

みられていない1970年代研究に先鞭を付けることが可能となる。

2. 研究の目的

第1に、岸信介関係文書の総体を検討し、文書の意義を明らかにすることで、岸信介、佐藤榮作らの研究の基礎史料を発掘する。すでに岸に対して詳細にインタビューを実施した原による適切なコメントを通じて、2年間という研究期間内において、岸家所蔵資料の全体像を見渡しながらか、確実に重要史料を拾い出し、分析する。

第2に、岸信介の日記・手帳というこれまで研究上利用されたことのない重要史料の発掘によって、戦後史・戦後政治学研究のための学界への史料提供を行う。

第3に、日本における政治家・官僚等への大規模なオーラル・ヒストリー・プロジェクトを推進している御厨・牧原が適宜同プロジェクト記録との比較を行う。特に、1970年代前半に内閣法制局長官を務めた吉國一郎がその日記を読み上げたオーラル・ヒストリー・プロジェクト記録は、1970年代の岸の行動と比較対照することが相当程度可能である。これらの記録と比較することによって、必ずしも容易でない口述記録と日記との比較作業を短期で集中的に行うことが可能である。

第4に、これまでの戦前政党史研究、占領史研究、戦後政治外交史研究を基礎に、戦後1960年代までの政治史を前提に、1970年代以降も含めた政治史のパースペクティブを開拓する。

3. 研究の方法

(1) 田布施町郷土館における岸信介関係文書の内容の整理である。同史料は、文書名を記した目録が存在するのみで、内容に即応した整理がなされているとは言い難いのが現状である。すでに一度これらの史料に目を通した原を中心に、重要史料の内容を摘記した目録の作成作業を行う。

(2) 岸日記・手帳・書簡など基本史料の複写である。同資料館には、岸家から寄贈された膨大な史料が存在しており、これを機会に包括的に閲覧し、必要なものは複写をとる。

(3) 資料の分析である。政党内閣制、自民党組織論、首相の政治指導、アジア外交などの観点から分析を行う。また日記の公開について可能性を探る。

4. 研究成果

まず、本研究では2007年度は、第1に、

従来の岸信介研究を整理した。ここでは岸に綿密なインタビューを行った原教授によるインタビュー実施の状況について詳細な報告を受け、岸関係重要人物についての情報の整理を行った。第2に、山口県田布施町郷土館で岸信介関係資料の複写を行い、資料の整理を進めた。資料は、書簡と書類に分かれ、前者は自民党政治家・諸外国の政治指導者による岸への来翰であり、これを整理した。次に後者は、岸の1970年代以降の日記・手帳と、岸信介後援会活動を中心とした公刊された岸執筆の文章である。

まず書簡については、すでに『岸信介の回想』において翻刻されている木戸幸一宛書簡や、『吉田茂書翰』において翻刻されている吉田の岸宛書簡の原文のみならず吉田の佐藤榮作宛書簡もあわせて所蔵されており、吉田が佐藤を介して岸にメッセージを託していることをうかがわせている。また、巢鴨からの家族宛の書簡は、岸の家族への細やかな愛情が読み取れるだけではなく、政治情勢への考えも示されており、資料としても興味深い。同様に絵はがきの多くは、外遊先からの家族宛の書簡となっており、岸の外遊日程をうかがわせる資料でもある。また、外国の要人からの書簡の多くは、外交儀礼としての性格が強いが、岸の交友関係の幅を読み取れる資料である。

次に、日記類については、懐中手帳が1971年から1986年まであり、予定と若干のメモが書き込まれている。また、1975年から86年まで市販の当用日記に記載されている。懐中手帳は会合などの予定が書き込まれているが、末尾に密接に電話連絡をしていたと思われる相手方の電話番号が記載されている。特に、岸が自民党最高顧問となった鈴木内閣時代には、翁久次郎官房副長官、田中六助通産相の名前が見られるのが、岸と官邸との強いパイプをうかがわせている。また、外遊中は、懐中手帳が印象記としての役割を果たしている。たとえば、スリランカの首相について、「午後七時総理官邸にプレマダサ総理を表敬、田中角栄そっくりの大臣である。学歴もなく出身も名家の出ではなく党内長老の信望もなく大統領も信任していないようだが党内の実力者であり選挙で与党たる国民党の圧倒的勝利を作り上げた中心実力者であり総理となりたる由なり。性格は大統領と正反対の如く見受けられる。打てば立ち響くような頭の働きの早い鋭いものを持っている。」(1979.9.27)と記しており、岸の田中角栄イメージが雄弁に語られている。

他方で、当用日記は、本文書の中で最重要の資料であり、岸の日々の行動が相当程度詳細に記述されている。岸は、福田のみならず、田中角栄ともラジオ関東への許認可関係の件を口実に定期的に接触している。また、グラマン事件における岸と弁護士側の動きについて「検事より妥協の申し出ありとの事なれど余は良心に従ひ真実を最後まで主張し妥協などすべきに非ずと激励」(1979.5.8)といった記載が見られ、岸の政治生命をかけた行動の一端が読み取れる。さらには、最高顧問に就任後は、会議の様子を詳細に記載しており、新聞報道とあわせることで、自民党の最高顧問制度が派閥対立の緩和のために設置されるとともに、「挙党体制」が安定化した中曽根内閣下で、次第に首相の外遊前後の会合という軽い位置づけとなった過程を整理することができる。

2008年度では、以上のように資料を整理した上で、研究会でその概略につき、読み合わせを行うとともに、研究会メンバーからの分析報告を行い、それにもとづいて討論をし、戦後政治とりわけ1970年代の日本政治についての理解を深めた。第1に、岸の政治構想なかならずく政党構想である。第2は自民党組織論である。第3は、岸内閣期の外交政策である。

第1については、「何もしない善人より、何かをする悪人の方が何かの時に役に立つ」と述べたという岸は、自らが提携しうる政治勢力の幅が右から左へと極端に広がった。そこから見ると、国民運動を基礎とした保守新党、自動調整作用を持つ二大政党制、それに駆動力を与える小選挙区制という政治構想が戦後に一貫している点が特筆すべきである。岸にとり、戦後政治は保守合同によって誕生した自民党が起点である。ここで、自民党と社会党との間の二大政党の対決の図式が成立した。また、ここで憲法改正が党の基本方針となった。岸にとり、保革対立と憲法改正とは、ともに戦後政治の不可欠の要素である。不断の対立によって、改憲を実現するという「運動」を戦後政治の特徴とみたのである。

第2については、岸信介日記と佐藤榮作日記を比較すると浮かび上がるのは、顧問会、長老会議、最高顧問会議で活発に発言・行動していた岸の姿である。佐藤榮作日記を見ると、佐藤内閣下で構築された統治の作法に拘泥しない田中に佐藤がいらだっている様子が印象的である。そしてこの田中が金脈問題で失脚し、逮捕・起訴される中で、従来の統治の作法を再建するには、長老政治家が動か

ざるを得ない。ここから岸は、長老会議を活用した福田首相、顧問会を再編し最高顧問会議を設置した大平・鈴木内閣時代を経て、最高顧問として首相選定で積極的に発言し、首相外遊の前には外交に注文をつける存在となる。これらの会議で岸は福田と連携しつつ、福田・安倍晋太郎のを首相候補として推薦する一方で、田中角栄とのコミュニケーションを断たない位置に立ち、中曽根には改憲運動の担い手として期待を寄せ、激しく対立する派閥間の調停者の役割を担ったのである。

第3については、岸の日記に台湾が頻出し、APU、APPUのような反共的色彩の強い国際議員連盟の活動に積極的であったこと、インドネシア軍関係者とも面会していたことなどが読み取れる。岸は、中国と距離をとり東南アジアに関心を向ける「全方位平和外交」を支える存在であった。なお、この点については、岸時代の日本の東南アジア外交関係者として、デヴィ・スカルノ氏へのオーラル・ヒストリー・プロジェクトとしての聞き取りを行った。これを基礎資料として、今後新たに日本の戦後外交についての共同研究を進める基盤を整えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)
牧原出『『司法権の民主化』と『裁判官等質論』、『法学』、第72巻第3号、1～35頁
2008年、査読あり

〔学会発表〕(計 1 件)
牧原出「官邸主導と安倍内閣」日本比較政治学会、2008年6月22日、慶応大学日吉キャンパス

〔図書〕(計 2 件)
御厨貴『表象の戦後人物誌』千倉書房、2008年、264頁

天川晃『現代史を語る9 鈴木九萬』現代史料出版、2008年、310頁

〔その他〕
デヴィ・スカルノ・インタビュー(聞き手：原彬久・御厨貴・宮城大蔵・牧原出)「東大で語った愛と革命の半生」『文藝春秋』2009年4月号、316～326頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧原 出 (MAKIHARA IZURU)
東北大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：00238891

(2) 研究分担者

原 彬久 (HARA AKIHISA)
東京国際大学・国際関係学部・教授
研究者番号：60129096

天川 晃 (AMAKAWA AKIRA)
放送大学・教養学部・教授
研究者番号：10009813

御厨 貴 (MIKURIYA TAKASHI)
東京大学・先端科学技術研究センター
・教授
研究者番号：00092338

宮城 大蔵 (MIYAGI TAIZO)
政策研究大学院大学・政策研究科・准教授
研究者番号：50350294

伊藤 正次 (ITO MASATSUGU)
首都大学東京・社会科学研究科・准教授
研究者番号：40347258

村井 良太 (MURAI RYOTA)
駒澤大学・法学部・准教授
研究者番号：70365534

五百旗頭 薫 (IOKIBE KAORU)
東京大学・社会科学研究所・准教授
研究者番号：40282537

(3) 連携研究者

なし